

★基調講演 全体文字起こし ソトコト編集長 指出 一正 氏

「わたしたちはローカルで幸せを見つける ～関係人口とウェルビーイング～」

はい。皆さんこんにちは。今日、お招きいただきましてありがとうございます。とてもとても楽しみに伺いました。「ソトコト」というメディアの編集長の指出と言います。兵庫県さんの取り組み、素晴らしいなと思って、お話もずっと聞いていたので、今日こういう形で一緒にできることを本当に幸せに思っています。40 分ぐらいですね、関係人口のお話をさせてください。そんなに難しい話ではありません。自分の視点から考えるとところあったりとかが、大きいと思いますけれども、楽しんでいただけたらと思います。では、始めたいと思います。お願いします。

まず、僕は息子と妻が住吉の駅の近くに住んでいます。僕自身は東京に編集部があるので、二拠点生活をしているのですが、普段は、割と家族と一緒にいるときはやっぱり住吉川を歩いていることが多いですね。ワンちゃんもですね。保護犬のサクちゃんもですね。住吉川も多自然型の護岸ですかね。しかも魚道ですね、思いやり魚道ですかね。これ素晴らしい仕組みだなと思って見ています。僕は、実は川にとっても興味があって、兵庫の川の水系、割といろんな場所に行っているのですが、釣竿を持ってよく出掛けます。こんなに美しい宝石のような魚がいるなと思いながらよく釣っているのがこのアブラボテという魚です。皆さんのお住まいのところにいるかもしれませんね。これは土地の豊かさ、特に土の肥沃さを表す象徴的な魚だなと僕自身は思っています。僕の中ではサクラマスがいるか、イワナがいるか、タンボリがいるか、イワナがいるか、それからタナゴの仲間がいるか、これで自然の資本っていうか、地域の豊かさを図れるのではないかと考えています。

これは37年前の僕です。右側は僕です。左側は、兵庫県豊岡市出身の田口幹也くんって僕の大大大親友です。今もお付き合いをずっと続いています。年に何回かは豊岡に行って一緒に美味しいご飯を食べたりしながら、談笑をしています、大学時代、ずっと一緒にいました。

そして、その後も青山の一軒家と恵比寿の一軒家は2人で買って、今でこそシェアハウスは珍しいですが、あの頃は、男子2人で、しかも10代とか20代の男の子が「なんで、青山で一軒家を買いたいのか？」って大家さんに言われながら、スーツを着て、履歴書を持って、それで面接して、あなたたちいいわねって言われて買えたんですね。パイオニアです。シェアリングエコノミーの。ちなみに田口幹也くんは「城崎国際アートセンター」初代館長です。皆さんも知っているかもしれませんね。今ああやって、豊岡が町に若者が溢れていくようになって、そしていろんな人たちが現れるようになった、そういう大きな流れを豊岡のみんなが作ったのですが、その中の一人かもしれません。更に、左側のこのイカしている水玉のシャツは僕のシャツです。実は身長も結構似て

いて、シャツ、体型も似ていて、靴のサイズも同じなので、2 人で暮らしている時はファッションに困らなかったですね。お互いにこうやって持ち寄っていました。

これは先ほどご説明いただきました僕の書籍、2 弾目です。「On The Road」という本です。これは、今、神戸と二拠点をしている、この 3 年間の話がだいぶ詰まっています。興味があつたらぜひ読んでください。そして、おかげさまで最近重版決まりました。重版出来ですね。しかも、高崎経済大学・地域政策学会の推薦図書にしてくれて、嬉しい限りなので、地域づくりとかまちづくりとか、「リジェネラティブ」とか二拠点生活とか、地方創生、関係人口、興味があれば面白いので読んでいただけたらと思います。

ここからそろそろ本題に入ります。

今、「二拠点思考」という言葉を提唱しています。これは関係人口の裾野を広げてくれるんじゃないかな。どういうことかという、「二拠点居住だと、その先に住む理由が見当たらないです、指出さん」ってよく言われるんですね。確かにそうですよね。今住んでいる兵庫県内の美しい町々に住んでいたら、拠点をもう 1 個持つ必要はないかもしれない。だけど、思考だったら持った方がいいです。

自分がこの場所にいる生き心地と、それから、もう一つの自分を手に入れて、更に居心地の良さを手に入れたらいいはず。だから、僕は「二拠点思考」という言葉を提唱しています。これはめちゃめちゃ刺さっていてですね。昨日か一昨日か、上智大学の西宮市出身の女性の方と大学のみんなと一緒に集まったときに話をしたら、「指出さん、わたしも二拠点思考なんです」と。「東京で大学生活しているけれども、友達がみんな西宮とかにいるから、西宮のことも大好きで定期的に帰ってはみんなと一緒に過ごしているんです。これって二拠点思考ですか？」って聞かれて、大きくうなずきました。皆さんもぜひ、心の中に土地を、地域を持ってください。

関係人口の話をしていきます。関係人口をわかりやすくお話しすると、「観光以上移住未満の第三の人口」だと言われています。僕が編集長を務めているメディア「ソトコト」でも、かなりポイントで、関係人口の特集をいっぱいやってきました。関係人口、僕は英語でこう訳しています、「コネクテッドマインド」ですね。これはもう完全に、編集者としての流麗な意識です。でも、おそらく心が通じるみたいなことで人は移動することを思うと多分悪くないのじゃないかと思いますが、こちらで見ていただくと、「定住でもなく交流でもない継続的に地域に関わるローカルイノベーション」と言われていますが、これ僕が国土交通省の委員を務めているときに、小田切先生や皆さんと一緒にアンケート調査を精査して、結果的に全国に 1800 万人以上が関係人口的な動きをしているのでは？という数字を数年前に国交省は作りました。

僕自身はこれに更に、実は輪をかけて関係人口がいるというふうに定義しています。なぜか？これは 18 歳以上の人たちだけを対象にしたわけですね。13 才のみんな、12 才のみんな、「指出さん故郷って、自分の生まれた場所だけじゃなくてもいいんですかね？」と。女川にフィールドワークに行った中学生、高校生の女の子たちがそう

問いかけてきました。まさにそうです。ふるさとはそもそも故郷ではありません。古い里です。古い里というのは、心の中で自分の中が拠り所になったところをふるさとと呼ぶ、これが本当の正しいふるさとですから、いくらあっても構いません。自分の中でふるさとを二つ三つもつのは当たり前のことでいいんじゃないか、ということを僕は若い皆さんにもお伝えしているので、関係人口は 1800 万人どころじゃない。だから、兵庫の仲間に取り入れていきましょう。

僕は関係人口という言葉の提唱者の一人と言われています。ありがたい限りです。その中でも、特にこの 2012 年に始めた島根県さんとの関係人口の講座「シマコアカデミー」というものですが、これはもう 14 年間続けていて、地域の関係人口の講座の原初と言われています。ありがたいことに島根に关系人口が続々と増えているのですが、もう 14 年やっているんで、600 名以上の方が終了して、引き続き継続して関係人口として島根に関わってくれているんですね。そういうみんなが、なぜ地域やローカルに興味があるかっていうのを、3 枚の写真で説明します。

こちら、また来週か再来週行くのでわくわくしているのですが、僕は島根県での西部のある川の水系に行って、この魚を釣るのが大好きなんです。僕は元々釣り雑誌とかアウトドア雑誌の編集者だったんです。大学時代からずっとアルバイトでそんなことばかりやったのですが、これはですね、イワナの仲間の「ゴギ」という魚です。僕が今愛して愛してやまない中国山地の清冽な水の流れに住んでいる愛おしい魚です、「ゴギ」。皆さんプルコギ好きですよ。語源が同じです。ゴギとコギは食べられる魚、そういう意味です。かつて中国山地は日本を代表するテクノポリスでした。なぜか？「たたら製鉄」がきたからです、大陸から。「たたら製鉄」の半端なイノベーションの力は今でも類を見ません。

なぜかという、木の杭や、斧や、田んぼを作るものが鉄になった訳ですよ。これだけのイノベーションだと思いますか？ 200 人しか住めなかったところに 2000 人住めるぐらいのスピードで田畑が作れたわけです。これが本当のイノベーションです。それを支えたのが「たたら文化」です。そして「たたら製鉄」の職人が大陸を渡って中国山地にやってきて、その中で「あ、これは食べられる魚だな＝コギ、ゴギ。」と言って、それがまだ残っている。奥ゆかしいですよ。このような素晴らしいふくよかな文化が僕は大好きです。

そして昼間は魚釣りをして、夜は江津市役所の職員の友人と反省会に出かけます。夜に繰り出すのはですね、江津市の駅前の、ある居酒屋です。「養老乃瀧」です。皆さん、松本で木下藤吉郎さんが「諏訪湖には鯨がいない」と言って、横浜に飛び出して驚異の 2500 店舗を達成した日本が誇るフランチャイズです。プライベートブランド、食べ物、お菓子、全部ここから始まりました。

養老ビルですね。2535 店ぐらいあるんですけど、「養老乃瀧」に入って僕は、なによりも頼むのですが、魚の刺身、魚のフライって書いてある 300 円とか 500 円

のものがああります。そうすると、「養老乃瀧」ですからね。フランチャイズですけど、チェーン店ですよ。出てくるのがこの刺身です。店主が自分の最高のボートで青々と広がる日本海に出て行って、自分で釣り上げたノドグロやクエやハタ、高級魚ですね。これが普通に数百円で、フライや刺身で出てくる。当たり前の光景だと店主は言うけれども、これ、地域が揺らぐといいます。揺らぎに、地方創生のヒントがあります。1 cmのものは、大きな駅の前では1 cmにしかありません。だけれども、1cmが7cm、30 cmになる揺らぎが起きる場所は、それが中山間地域や多自然地域です。ローカルと言われている場所に若い人が惹かれる理由は、このセンチのボアアップですね。揺らぎ。とても大事なことだという風に思いますので、ぜひ、ここで認識していただけるといいなと思います。

さっきの江津市。高校の教科書でこう書かれました。ご存知の方もいると思うのですが、東京から一番遠い町と書かれています。江津市に行くのに何時間かかるのか、江津市役所の職員の方が調べたものはネットであげているので、興味があったら見てください。そうやって江津市は遠いんですけれども、その代わり、揺らぎます。この揺らぎをぜひ味方につけましょう。

島根県の関係人口講座「シマゴトアカデミー」は、このような 20 代 30 代の若い方々が大勢、講座を受けてくれているのですが、修了した後にいろいろな変化が起きます。どんな変化が起きるかという、地域と自分との距離をちゃんと勉強したり、感じられる人たちが、修了するにつれ、島根県の中にですね、ナチュラルワインと浜田の漁港の最高の魚をペアリングしたレストランが「シマゴトアカデミー」の修了生によって作られました。出雲大社の近くには発酵をテーマにしたおしゃれな女性の方がおしゃれに作っている新しいコミュニティスペースを作られました。そこから 1 分歩いたところにはイケメンの男子が、東京と二拠点でやっている量り売りの店が作られました。みんな「シマゴトアカデミー」の修了生です。関係人口だったみんなが、島根に今これがあると自分も島根も楽しいよねっていうふうに言って作ってくれています。閉館に追いやられた映画館を復活させたのも、関係人口講座の修了生のご夫妻でした。「Shimane Cinema Onozawa」。これが益田市にできています。更に自分の地元、ちっちゃなパン屋さんを開いた女性の方は、この場所を浜田に作った途端、広島を超えてここに行列ができるようになりました。小さな集落に新しいお店がこれをきっかけにポツポツできるようになりました。これが、エリアイノベーション、エリアイノベーションです。こういった形で地域に関わる人たちがそこに住んでいる人だけでなく、町や地域を盛り上げる現象が関係人口は起こすという力、可能性を秘めているというのが、この島根県の例で、まだまだいっぱいあるんですけど、こういうのでお分かりになるのではないかなと思いました。

最近僕は島根県の講座を始めてもうずっと経ちますけども、20～30 位の地域からご依頼をいただいて、関係人口の講座を作って先生をやっています。

今年度から秋田県鹿角市「かづコトアカデミー」というのを始めました。こういう講座を開いたり、各地域で新しい盛り上がりができているところに、どんな条件があるのか、どんな共通点があるのか？というのを去年(2024 年)の春に提唱しました。「やわらかいインフラセブン」って言います。これも大変、いろんな方からご依頼いただいて面白がってですね、国の広報誌、いろんな広報誌に寄稿したのですが、やわらかいインフラがあるかどうかというのは、街に人が現れて関係人口が生まれる大きな理由になります。

これがやわらかいインフラセブンです。水道やガスや電気というよりも、もっとも何となく人の生活やライフスタイルに近いもの、と考えてください。読み上げます。

- ① おいしいコーヒー
- ② バチバチの Wi-Fi 環境
- ③ 同世代の仲間
- ④ おしゃれな本屋
- ⑤ 盛り上がるブルワリー
- ⑥ 使い勝手のいいコワーキングスペース
- ⑦ 最高のパン

皆さんが今関与されている地域に、この7つがあれば間違いなく神奈川県真鶴町のように、群馬県前橋市のように、長野県御代田のように人が続々と続々と現れます。これはちなみに、7つが集中してはいけません。何となく全部、小規模多機能施設みたいにしがちなんですけども、北斗七星のように分散させて、主人公を複数作るんです。そして滞留してもらう。そして軸をずらしながら、ひとつのところに過集中しないことで経年を拒むんです。こうやって地域に盛り上がりを作ること、新しい人たちが来て、また新しいやわらかいインフラを作っていきます。

最近僕がすごく力をいれている、どこも力を入れています、嬉しい変化が起きているなと思っているところが、あと 3 日ぐらい経つと、メモリアルな日がありますよね。3. 11 東日本大震災で帰還困難区域だった福島県相双地域から依頼を受けてやっている関係人口講座です。双葉それから相馬ですね。楡葉町とか、大熊町、双葉町みたいな、皆さん一度は聞いたことはあるでしょう。原発の事故で帰還困難区域を段階的に解除されていった 12 市町村に関係人口を作るという構造を設計し、伴走をしています。

今、3 年が経ちました。この講座を受ける人たちは復興ボランティアっていうカテゴリーに入っている人ではないんですね。どちらかというと、例えば、高校生であったり、大学生であったり、20 代くらいのおみんなが楽しそうに受けてくれている。どうしてこの講座が面白いもしくはそもそも相双地域が面白いんですか？っていうのをこの前 100 人ぐらいが集まってくれて、地域に関わる人たちが集まってくれて、大学生にインタビューしたら、「未来を作ってる感は半端ないですね。」という答えが男女ともに

返ってきました。

自分が何かをやっていること、それからその人がやってることを見ていると、確実に社会が変化していることが手に取るようにわかりやすい、そうなんですよね。のっぴきならない状況から、マイナスからプラスに移ろうとしているタイミング。きっと 30 年前の阪神淡路大震災をご経験された方もそのような未来に向かう復興のエピソードであったり、想いみたいなものを今も心にしっかりとお持ちなんじゃないかと思いますが、人は有事のときに未来を思いっきり作ろうというスピード感が満点であるんです。そして有事のときだから、出てくる人たち。普通ときには現れないけれども、有事のときに出てくる人たちが、例えば東日本大震災のときは、首都圏にいる「東北」という言葉を知らない 20 代、10 代の男の子や女の子でした。圧倒的な力でソーシャルアクションを起こした彼らが、社団法人や NPO 法人を作ったりして、まちづくりを三陸に広げたっていうのは、大いなるインパクトだったと思います。

これが有事のときの人の立ち現れる姿です。なので、今人口が減っているっていうのは大きな有事なんですよね。この人口が減っているっていうことはマイナスにしか見えないかもしれませんが、新しいタイプの人たちが立ち現れると考えると、それはそれでもしかしたら次の希望に繋がるチャンスなのかもしれないな、と僕は思っています。こういう人たちは、おそらく東日本大震災や帰還困難区域になったっていうことがなければ現れなかった人たちです。フィンランドから戻ってきたトライリンガルの高校生とかですね。こういうみんなが接点を持つっていうのは相双地域が今盛り上がって大きな理由になっていると思います。

では、ちょっと面白い話をしましょうね。多自然地域という場所は、本来、例えば 2 万人とか 3 万人の人口規模ではない場所の方が多いと思います。僕も関係人口が現れやすいなという場所は、例えば小さな場所でも現れますし、人口が 40 万人の町でも現れるんですけども、比較的明確に何が起きるのがわかりやすいのは、人口が 1000 人ぐらいの先ほどのお話のような小学校単位みたいな形だとわかりやすいのかなと思いますので、今日はこれを持ってきました。

奈良県の下北山村です。人口が 800 人ぐらいの村なのですが、ここで僕はもう 30 年ぐらい通っているんですけども、関係人口の講座を仰せつかって、「下北山村コトアカデミー」というのは、真ん中でピースサインをしているお茶目な村長から言われて始めました。2010 年から 16 年ぐらいですね、受けてくれた人たちは、20 代の日本橋で働いている若い方々がメインでした。村長から関係人口の講座を作りたいんだけどっていう風に言われて「やりましょうやりましょう。でも 20 人とか 30 人とかの講座じゃなくて 10 人ぐらいが規模的にはいいんじゃないですかね」みたいなところから始めたものです。

実際に地域の魅力を知ってもらうためにはその場所にお連れすることが大事なんですけど、特に相手によって予定表をつくったり、当番表やスケジュール表を作ることは

あまりしないのが僕の講座の特徴です。では何を見せるのか。来てもらうのですが、下北山村で彼らをお連れした場所はこんな場所です。

これは神社です。鳥居がないですよ。でもこれ、池がご神体の「池神社」と言いまして、下北山村にいいことがあると、巨木が水平から浮かび上がって水面をゆっくり回るんですね。本当かな？と思ったら、ぜひ見に来てください。

次にお連れするのは「前鬼」前の鬼と書く集落ですけども、前鬼川の奥の奥にあるのですが1300年続く集落がここにあるんですね。これは前鬼集落です。今も人が住んでいます。人というよりも、鬼の子孫ですね。1300年前に、ここに集落を作った前鬼と後鬼、役小角(えんのおづぬ)に仕えた前鬼と後鬼の夫妻の末裔なのか、子孫ですね五鬼助(ごきじょ)さんという方がここにまだお住まいです。東京から若い人たちを連れて行って五鬼助さんに会っていただいて五鬼助さんは鬼の子孫なんですよ。僕から話をするとみんな目を白黒させて、五鬼助さんは「指出さん、去年も来てそんなこと言っていたな」と言って、奥から古い地図を持ってきてくれるのが五鬼助家の家系図ですね。それでこの家系図を開きます。みんなこうやって車座になっているところで、さあ開いていきます。開くと、初代から66代位までのご近所さんのご先祖様たちの名前が載っているんですが、注目してもらいたいのは、下の、ご存命だった歳です。年齢。初代を見ていただくと、195歳まで生きたんですね。二代目は147歳、三代目は131歳、四代目が115歳、五代目になってようやく人間近づきました、98歳です。

これを東京生まれ東京育ち川崎生まれ川崎育ち、Googleで検索する若いみんながこれを目の当たりにするとこんな表情なんです。「何これ、これやばい」。「私が見つけた村、この私が見つけた兵庫だ、私が見つけた佐用だ、私が見つけた城崎温泉だ。私が見つけた千種川だ。」という言葉を引き出すのが僕の作戦です。僕が教えた兵庫の美しい地域ではありません。自分で見つけた、だから自分で関わりたい。関係人口の初動がここから生まれます。

この笑顔から下北山村、私が見つけた村だ、なにか村の役に立てることをやってみたいな、みたいなどころから、お互いのコミュニケーションが始まりますよね。こうやってコミュニケーションが始まってくると先輩世代、それから若い世代、関係なくいろんな例が起きています。美味しいご飯を食べたりしながら、自分ができることを真剣に考えてくれます。そして、これは外から来る関係人口の変化なんですけれども、これだけではやっぱり勿体なくてですね、僕は中からの変化を期待しています。

「なんだっけ、あの片仮名のヒトゴトだかヨソゴトだかタニンゴトだか、長々と喋る前髪が長い、差し出がましいとかいう編集長が、言ってたことはほんまやったわ！」「関係人口だっけ？なんか20代30代ぐらいの若いみんなが、村んなか歩きよる。」「でも待てよ。2泊とか3泊とかしてくれるけど、若い人はそんなにお金持ってへんやろうからもうちょっと安く泊められる場所があった方がええんちゃうか？」と言ってですね、

下北山村では、年間に 3 軒の農家民宿ができました。自発的にです。誰もお願いしていません。村を歩く若い人たちが村を見つめてくれる若い人たちの視線から、自発的に地元の人たちが作ってくれたんです。更に、1か月とか滞在する人が出てきたりすると、村の人たちも「働き盛りの若いみんなが何か仕事できる場所があった方がいいんじゃないか？」と言って、廃園だった幼稚園舎をリノベーションしてコワーキングスペースを作ってくれました。ワーケーションという言葉が生まれる7年前です。

場所が生まれると人が集まります。サテライトオフィスとして使う若いベンチャー企業が続々と下北山村に集まりました。若い人たちが滞留すると下北山村の夜が変わります。こうやって村長を囲んで、みんなでご飯を食べる時間ができてきましたね。これは双方にとってとても共益的です。更に、空気が変わります。一度は閉鎖した製材所がリオープンしました。ちょっと面白いことやってみようよって夜の会話の中から勢いになってですね、こうやって製材所がオープンすると、奥大和と言われる奈良県南部・東部の協力隊のみんながやっている木工作家みたいな人たちがここに集まるようになって、さらに場が広がっていったんですよね。

更に関係人口として大学生がこの講座を受けてくれていたんですが、慶応大学の女性の方が、あまりにも美しい村の風景に痺れてくれてですね、これは友達にも見せないといけないんじゃないかと言って、学生の任意団体「まとい」というのを作って、6時間から7時間かかる下北山村を行き来してくれるようなことが起きました。

慶応だけではありません。早稲田のみんなも、東大のみんなも、首都圏の錚々たる大学のみんながここに続々と来るようになって、村長が右側でニコニコしてますけども、空いていた家をですね、学生のその団体にお渡しして「ランチ」という学生が自由に寝泊まりしたり、いろんなことができる場所として提供したところ、結果的に関係人口が往復する、というようなことが広がっていったんです。

更に、この関係人口講座を通して、移住をした女性の方がいて、その方がモリタサヤさんという方が移住して、東京のベンチャー企業に勤めていた東京生まれの方ですけども、この下北山村は東京の若い人たちにもとてもいい場所だということから、例えば東京で心をちょっと疲れてしまって、鬱になった。これはすごく普通にあることに今なっていますけれども、そこからどう回復したらいいかっていうときに、転地療養の宿泊型のサービスというのを下北山村でやろうと言って、一定期間は下北山村で、地元の人たちが作っている奥大和野菜の収穫を手伝ったり、役場の手伝いやサポートしてもらったりしながらゆっくり回復していくっていう、そういうサービスをやったところ、大変に大当たりして、実際に下北山村もここで暮らすのが自分にはちょうどいいですねと言って、ここにそのまま住むような若い人たちも出てきたのが、この関係人口の講座から、1回目の講座、1回の講座をやって、起きたことです。これは大きなことだと思います。1回の講座でこれだけのインパクトが下北山村に起きた、という意味でも、新しい人たちがやってきて、中の人たちと交流をすることで、自分で気づく、他人

に気づく、地域に気づくというのがこれなんですね。

さあ関係人口は何となく、ことわりが分かっていたと思うので、関係人口をどうやったら増えていくのかっていう僕なりのご提案をさせてください。

そうですね。兵庫県はもう先進的な「関係案内所」があると思いますが、この関係案内所という場所がいかにあるといいか、ということです。

例えばいくつか説明しますが、こちらは横浜国立大学と横浜市立大学の大学生たちが在学中に作った「関係案内所せとさんち」です。大学では、勉強する機会があるんだけど、でもいざ大学の授業が終わると私達は思った以上に地域づくりや地元の人との接点がないっていうことに気がついた学生たちが、自ら場所を持って地元の先輩世代やワンオペで、めまいがしそうな育児をしている若いファミリーが自由に行き来できる場所としてこの「せとさんち」を作りました。フルハンドメイドですけども、だからこその温かみがあって、この場所に地域の瀬戸という地域の皆様が往来するような風景が当たり前になりました。大学生たちがやっていることは、自分が好きなことをみんなにおすそ分けするような行動が多いです。焼いもを作る会とか、焼きリンゴを作る会、古着をみんなで持ち寄って古着を交換する会とか、その自然さとか柔らかさが、地元の方々にもすごく評判で、地域の人たちも受け入れるし、学生たちも学生たちで、町内会のイベントに参加するような相互交流が行われているのもとてもいい例じゃないかなと。そして僕は最近できた関係案内所の中で一番大好きな例をお見せします。

皆さん行ったことがありますね、きっと。「NATURE STUDIO」です。これはすごいと思います。今、小学校や中学校の廃校をどうしたらいいかということで、迷っている1700以上の市町村の方々にとって一つの解決策を出したんじゃないかな。村上豪英さん、兵庫、これは旧湊山小学校ですね。卒業生の方もいるかもしれません。

140年続いた旧湊山小学校の校舎をリノベーション、校庭もリノベーションして、このような人と人との関係を、自然を介して出会えるような自然な仕組みを作ったのが、3年ほど前にオープンしたNATURE STUDIOですね。左の木枠のグリッドが美しいところは、例えばB型の就労支援施設が入っていたり託児所が入っていたりとか、どちらかという福祉関係がある人たちで、ここは入居されている場。

体育館はリノベーションして、神戸や兵庫の美味しい料理が食べられるフードコートになっていて、手前は水族館になっているという、とても夢のある関係案内所ですよ。もう地元なのでそこまで話しなくてもいいと思うんですが、水族館があったりフードコートがあったり、そして何よりも校庭はエディブルヤードですから、食べられるエディブルガーデンですよ。これはおそらく兵庫という多自然地域と素晴らしく洗練された都市がしっかりと内包されている、非常に類まれな地域だからこそできる関係案内所です。

要は、人は人として暮らしているけれども、そこに介在しているものがあるだろう。

六甲の近くに暮らしていればわかるじゃないか、と改めて村上さんは投げかけているんじゃないかなと。僕は神戸在住歴 3 年なので、大したことは言えないんですが、これだけしっかりと人が生きていくために必要なものが、自然界としてちゃんとそれがぐるりと囲ってくれているっていうことが享受できる地域。だからこそ、人と人との関係に目が行きがちだけれども、僕たちも一つの生き物として、周りの風景が環境とともに生きているっていうことを柔らかく伝えたいというのが、このネイチャースタジオの根幹にあると言って、関係案内所の関係というのは人と人との関係を案内することが定義づけて提唱した言葉ですが、村上さんや神戸や兵庫の皆さん、もっと先を行かれますよね。人だけじゃない関係をちゃんと大事にしようということがここに入ってるんじゃないかなという風に思いました。

もうひとつ、全国的に共通の課題に対しての答えを、富山県富山市が関係案内所の視点で作っているものを紹介したいですね。「fil(フィル)」という場所で、一昨年(2023 年)オープンしましたかね。オープンに関して、僕もプロジェクトメンバーとしても本当に末席で参加させてもらったんですが、この「fil」というのは、富山の中心市街地できた学生向けのシェアアパートメントです。

富山大学と富山市民プラザという会社がですね、一緒になって、富山の富山大学の大学生は中心市街地や駅から 40 分ぐらい離れたキャンパス近くに住んで、そして大学を卒業すると就職で引っ越していってしまうので、せっかくこれだけの若い人たちが日本の各地から来て四年以上お住まいなのにも関わらず、富山の中心市街地に若者が現れない、という現象に対してのひとつのきっかけを作ろうとしたものですね。富山は LRT の元祖ですね。コンパクトシティを標榜してますけれども、空いているビルをリノベーションして、一階はみんなが食べる食堂になって、上は学生たちが住んでいる場所なんですけど、こうやって学生たちが街の中に住むきっかけを作りました。そこに住んでいる学生たち、古着が大好きな男の子が、インテリアが大好きな女の子とかが住んでいて、この「fil」はとても良い仕組みをしています。これ入居するときに学生の 10 万円をプレゼントするんですね。10 万円は大きい金額ですよ。給付金です。その十万円で何を買うかっていうと、この自分の部屋を彩るインテリアを買ってください。そしておしゃれな北欧デザインのカーテンを買ったりとか、ファッショ的にすごくイケてるラックを買ったりとかして、それぞれが自分の好きなような形で内装をデザインして、そしてもし入居から退去するときはそれは置いていってください、というのが条件なんですね。つまり大学生たちが大学生の居場所を作ることで、新しい人たちも、何か自分たちの価値観に合ってるなと思って、このビルの中を面白がっている。ひいてはその周りに広がっている富山の美しい中心市街地にも関与する人たちを作っていくというのが、この「fil」の作戦です。みんなが生き生きと自分たちの暮らしを楽しんでおり、シェアされてるスペースなので、共用スペースが多いですから、みんなが共用スペースで漫画を読んだり、最近ギター始めたんです、とギターを弾いたり、

何か、あいみょんの曲を弾いたりとかですね、やってるんですよ。

例えばなんですよけどもこれ、実際にお住まいの富山大学の学生の皆さんに写真とらせてもらいましたが、この彼女たちは実はこの「fil」を介して富山の市役所であったりとか、商工会であったりとか、そういったところと、自分たちもまちづくりに関わりたいっていう気持ちがある人、元々なかった人にも関わらず、その後コンタクトを取る中で、学生としての意見を言ってもらえればということから富山市のまちづくりの基本計画のメンバーになったりとか、富山のコミュニティFMのパーソナリティになったり、富山の新聞の連載記事を持ったりしながら緩やかに自分たちが富山の大学にいただけではなくって、富山市内にいる一地域の住まい手として、自分の今考えてることを発信するようなことを行うようになっていきました。これすごくいい仕組みじゃないですかね。

さてちょっと関係人口の話、関係案内所から少し広げていきます。今さすがに関係人口もいろんな形のものが生まれていて、その中でも特に僕が注目しているものの一つがこれです。

「流域関係人口」といいます。例えば武庫川の流域関係人口、千種川の流域関係人口とか何かそういう形で行政区をまたいだ関係性で、若い人たちが動いているなということに気づいたので、この言葉を提唱しました。これ発祥は山形県の最上エリアです。最上川が南北に山形県を貫いているので、特にわかりやすいんですが、自分の町のこと、例えば、これは真室川町の芋煮会ですけども、真室川のことをやる時は若手の農家の方が真ん中に入ってやっている。違う町の取り組みのときには、また違う町の人たちが中心となって、真室川町であったり、大空村であったり鮭川村であったり新庄のみんながそこで合流して、まちづくりのイベントをやっているっていうのは非常にお互いの個性を大事にしながら必要なときはユナイトするみたいなことが、山形県の最上エリアではもう13年以上前からやっている若い人たちがいるんですよ。これは何でこういうことが起きるのかなと思ったら、これはヴァナキュラーなんですよ。ヴァナキュラーとは固有の、みたいな話だと思うんですけども、僕たちが道路や空路を手に入れる前は、ほとんどが、つまり一番早い移動の方法は、川でした。川が最強のハイウェイだったんですよ。川は何を持ってきたかという、いい話ももってくるし、噂話ももってくるし、方言ももってくるし、お金を持ってきました。

そんな中で流域での繋がりを、もう江戸時代、もっと前からやって最上はもう本当にその発祥の地だと思うんですけども、例えば「しゃもじのことをうちのお母さん宮島っていうんだよ、変じゃない？」西日本の人にとって当たり前ですけども、東日本の人にとっては変なわけです。だけど、最上の流域のみんなの中では、「そうなんだよね。うちの母も宮島っていうんだよね、なんでだろう？」みたいな感じで、お互いの域を超えた中で深層的なことで繋がりを感じられる、要は仲良くなりやすいんです。これが「流域関係人口」です。最上だけではありません。

この「流域関係人口」の話をしたら、江の川の流域関係人口、吉野川の流域関係人口、筑後川関係人口という関係人口、若い人たちが続々と向こうにメッセージを入れて、「そうなんです、指出さんはここでそう思ってたんですね。行政の区分だとなかなか難しいところを流域って視点だと割となんかお互いにスムーズにやり取りできる、あれなんなんでしょうねと思ってた。」っていうふうに令和や平成や昭和じゃないか、令和平成のみんなからしてみたら、昭和・大正・明治のときの当たり前が当たり前ではないので、川というものが、実は文化の中核を担っていたということ自体がドラマチックなんです。なので「流域関係人口」というのは古い話なんだけど、新しい視点です。

その中核をなしているのが新庄市のみんな。これ見てください。山形県新庄市、おしゃれですよ。今、日本のストリートはどこにあるのかなといったら、紛れもなくローカルです。大都市にストリート性は薄れてしまいました。昔は渋谷と新宿のストリートカルチャーは最高だったんですけども、今はやっぱりストリートカルチャーは東京を離れて全国に点在してますよね。ストリートカルチャーは何がいいか。

ミシュラン三ツ星シェフは、一階の雑居ビルの路面店からじゃないと出てきません。高層ビルの何階かに入っている由緒正しいところからはなかなか出てこない。やっぱり、のびしろ、関わりしろがあるのがストリートです。じゃあストリートはどこにあるのか。ストリートなんてどこにもあるじゃないかって言いますが、皆さんが関与してる場所はすべからずそのストリート。

話が長くなったので最後「ウェルビーイング」の話をしましょう。関係人口がウェルビーイングと何があるのかっていう話ですよ。ウェルビーイングっていうのは「身体的・社会的・精神的に良い状態」というのが WHO の定義です。そして、SDGsの次は、SWDs(エスダブリュディーズ)だろと言われてます。これはサステナブル・ウェルビーイング・ゴールズですね。これまではもうちょっと仕組みであったりとか、経済的な貧富格差みたいなことで、SDGsを言われていたんですが、元々MDGsのゴールでしたから、これからはもっと人の幸せにフューチャーする、ちょっとのことでの幸せを世界的に大事にする流れになってくるでしょう。実際にそれを考えるとウェルビーイング言葉がこの先のキーワードの大きなひとつだと思っています。この方、高野翔先生。福井県立大学の先生です。この方に僕は「ウェルビーイングって何ですか？」と聞いたんですが、高野さんは JICA の職員時代、ブータンに数年間着任して、幸せを研究していた人なんです。なのでウェルビーイングっていうのは、ふたつの行為によってそれが高まると言われています。高野さんから聞いたことですね。

ひとつは、短距離・中距離・長距離の移動を皆さん織り交ぜて日々暮らしているか、ということです。違う場所に行ったりとか、遠くに行ったりとか、同じ場所でもどまらないことですね。もうひとつは、自分の役割をちゃんと許容している場所を持っているか、これはサードプレイスの視点だと思いますけども、家と職場ではなく、自分の名前をフ

ルネームで言ってくれたりとか、自分のことを個人で認めてくれる場所に関与できて  
るってことが、人の幸せとウェルビーイングを高めるというデータが出ているそうです。

そう考えると、関係人口ってというのは、短・中・長距離の移動は必ずあるわけです。  
そしてもうひとつ、地域に関わるっていうことは、自分の家でもなく、職場でもないが、  
ある場所に自分が認めてもらって行き来が許されて受容してもらっているという幸せ  
に繋がる。これもウェルビーイングを高めるわけです。なので、関係人口というのはウ  
ェルビーイング度を高める行動だという風に考えてもらっていいんじゃないかなと思  
っています。

これだけ話をしましょう。これは京都府の与謝野町の話ですね。濱田祐太さんって  
いう、大学時代に起業した方が地元会社を作ったんですけども、飲めば飲むほど  
海が綺麗になる「ASOBI」というビールを開発しました。これ、与謝野町なので、天橋  
立の湾ですかね。そこで、牡蠣の養殖で廃棄されている牡蠣の貝殻を使うことで、硬  
水に近い水を作って美味しいドイツ型のクラフトビールが作れるということに着想を  
得て、この「ASOBI」というビールを作り始めました。この「ASOBI」を作っている「か  
けはしブルーイング」の皆さんですかね、ローカルフラッグという会社はこうやって、  
元々この与謝野という場所に、直接の接点もなかった 20 代の皆が学生であったり、  
副業をしながら、多拠点をしながら関与していく。そのビールが完成した後も、どん  
どんどんどん改良していった、先ほどのホップのお話があつてとてもいいなと思ったん  
ですが、こちらも 90 年代のアメリカのクラフトビールの時代のクラフトビール好きの  
先輩たちが、この与謝野にホップの畑を作ってたんですね。それを知った浜田さんた  
ちは、「じゃあローカル 100%でビールが作れるじゃないか」ということで、「ASOBI」  
というビールは地元のホップを使うような形になっていきました。更にお酒を飲んで  
も電車で帰れるように京丹後鉄道の駅をうまく活用して、その目の前にある用地を、自  
分たちの学生を中心としたメンバーで買って、ここに一昨年(2023 年)にビアレストラ  
ンを作りました。これもいい作戦ですよ。与謝野の美味しい野菜を食べに来てくれ  
たり、ビールを飲める人たちを呼び寄せるみたいなことで、そこに来る人たちも幸せに  
なっていく。そして、このように地域に産業もできるし、若い人たちの新しい関与の仕  
方で、仕事が生まれたという与謝野の関係人口の取り組みの一つの成果なんじゃない  
かな、というふうに思います。

さて、一回まとめます。質問をお受けできたらと思いますので、「私達がローカルで  
幸せを見つけるウェルビーイングの視点」ということで 4 つ持ってきました。

今僕がお話をさせてもらったものに通底しているキーワードがこの 4 つです。

①関わりしろがあるか。これは自分も何かやりたいなと思えるような空間であつたり  
場所であつたりってものが用意されているかどうか。余白ですよ。そういうもの  
です。

②ごきげんな状態、その地域やその関係性やそのプロジェクトがご機嫌な状態であるということも大事です。これはさっき申し上げた、ウェルビーイングの視点ですよ。精神的・社会的・身体的に良い状態というのを、僕は編集者の視点で超意識すると、ご機嫌な状態です。ご機嫌な状態に勝るものはなしだと思いますのでこれがちゃんとある。

③中、長期的な幸せも大事です。これは短期的な幸せをハッピーと訳されるのに対して、中、長期的な幸せはウェルビーイングなんですね。ハッピーっていうのは推しのチケットが手に入った！みたいな時のあふれんばかりの幸せ、高揚感が、これはハッピーです。一方で、一緒に兵庫の多自然地域を盛り上げた連携のプロジェクト(例えば、ため池)をやっているみんなが、プロジェクト終わった後に他愛もない話でゲラゲラ笑って一息ついた時に、目の前に見えた穏やかな夕暮れの空気を吸って「ああ、なんか俺幸せだな、私幸せだな」って思うとき。「この家族と一緒に良かったなと思う」というような、なんてことはないかもしれないけれどもちょっと今日満足なの私は、と思える。これが中、長期的な幸せです。この中、長期的な幸せがなかなか蔑ろにされているので、単発的なタイパもコスパも、ハッピーばかり追いかけて、社会そのものが中、長期的な視点の中で作り上げられてないんじゃないかなというのが僕の最近の疑問です。だからウェルビーイングという考え方が世界の中で、中心軸をつくるのであれば大歓迎だなという風に思っています。

④今日お集まりになってくださった皆さんは、ここにいる安心感を感じていらっしゃるんじゃないですかね。自分が何かをやっている。それは誰かとの関係性やその地域の関係者の中では、それって何か自分にとって何かほっとするなとか、何か自分の中で安心できるな、それを認めてくれているコミュニティがここにはあるな、みたいなことが、実は多自然地域の中で人がホッとする、心が和らぐ大きな強みなんじゃないかなという風に思いました。

はい、僕の話はこれで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました

<拍手>

(司会者)ありがとうございました。関係人口について、様々な事例を具体的にご提示いただきながら、その情景が浮かぶような瑞々しい会話と背景を、ピックアップしていただきました。ありがとうございました。今一度大きな拍手をお願いいたします。

<拍手>

とびきりの言葉をたくさんもうメモするのに必死だったんですが、ありがとうございました。それではお時間を頂戴できるということですので、会場の皆様から質問をお受けたいと思います。質問がおありの方どうぞ遠慮なさらず挙手をお願いいたします。

思います。

(質問者1)こんにちは。佐用町の江川地域づくり協議会センター長の久保と言います。ありがとうございました、貴重なお話をいただきまして。先生、言われることよくわかるんですけど、短期的なきっかけ作りというのはよくできるんですね。今、兵庫県の関係人口案内所の活動を一緒にやってるんですけども、その一緒にそこまで住んで、やってやろうっていうような人をですね、見つけるきっかけ作りっていうのをどうすればいいかなっていうのをいつも考えてるんですね。そのあたりのヒントとか、教えていただければいいなと思います。

(指出氏)はい。いい質問をありがとうございます。移住と関係人口というのは、切っても切り離せない間柄だなと思いながら、常に関係人口の話をしているのですが、移住に関しては、いきなり移住をするっていうことが、なかなか難しいくらいに、今、どこかに住みたいかなという人たちにとって、そういった情報が流れてこない世の中になっているというのが僕の考えです。なので方法論としては、いきなりその場所に来るという人たちを呼び寄せるよりは、佐用はいい場所だよということを広く広く伝えるような作戦で、何十人も来てくれる関係人口の人たちの中から、佐用を「約束の土地」として、この場所はなんか自分は居ていい場所なんだとか、この場所に吹く風はなんか好きだなあといった感覚的なところから、そこを運命だと思う人をどう見つけるかということだと思います。僕の中では人は必ず「約束の土地」に人生の中で三か所出会うとアメリカのある作家が書いているんですけども、そういう人たちが来やすい環境をこちらが用意しておくというのがいいと思います。

お話の中で、佐用はこういう場所ですよというのをなるべく伝えたい方が多いんだと思いますけれども、人は300個の魅力を伝えられても、0.5個ぐらいしかもって帰れない。だからむしろ言わない方がいい場合もある。これは「復習型の地域振興」って僕は呼んでいるんですけども、例えば、先ほどの下北山村は下北山村と呼ばれても京都、鎌倉っていう字面に対して印象がすぐ浮かんでくる人はなかなかいないと思う。だからこそ、むしろ与えない。自分の中で気になった風景を持って帰ってもらって、あそこの焼きそばのお店がおいしかったなというところから、また佐用に行ってみよう、下北山村に行ってみようというふうに復習型でその地域を面白がられる人をどう広く、一回呼んでみるかということがその場所に移り住みたいと思う人たちを結果的には増やしていく。もしくは継続的に現わせられる秘訣なんじゃないかなと思います。予習型だと予習をした時点で「なるほどね。この町はこういう町なのか」とインプット完了で、次の町に流れる可能性があるんで、なるべく見せないで、自分で調べてみたくなるような時を待つということも必要だと思います。どちらかというと、自分の方からはけしかけないで、自発的に興味を持ってもらうためにあまり見せない作戦。少

し意地悪かなとも思いますけど、それぐらいでもいいのかなと思います。佐用そのものは、とてもいい町だと僕も存じ上げておりますので。はい。

(質問者1)ありがとうございました。

(司会者)ありがとうございます。さあ、他の方がででしょうか挙手いただけたらと思います。約束の場所が見つかるというお話でした。せっかくですので遠慮なさらず、どうぞ挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか？ はい。お願いいたします。

(質問者2)若い方の、活躍の場はたくさんあるみたいに今お聞きしました。私は 50 代なんですけど、そういう人間は何か関わり合いができる場所はありますか？

(指出氏) はい。いい質問をありがとうございます。もちろんいっぱいありますので、ぜひ年代関係なく、自分にとって適度な距離感の地域づくりみたいなものをお探しになられるといいと思います。地域づくりももうとにかくやってやるぞっていうすごい熱い集まりと、何をやってるかわからないんだけどなんかすごくほどよい距離感、みたいなまちづくりと、今色々混ざり合っている状態という、良い意味ですごく僕は混ざり合っていると思うんですね。人が何かを継続するときって、ほんのわずかな接点を許されながら、長く関係を持続することを認めてくれるようなまちづくりや、地域づくりの方が多分居心地がいいんじゃないかなと思いますので、ご自身のタイプによって、2m くらいの距離感でまちづくりをやりたいとか、100 km 離れたぐらいの距離でやりたいとかは決められるような形で、町のまちづくりセンターとか、それこそ兵庫県庁のホームページなどで何かご覧なられてみるのはいいのではないかなと思います。今、ヘラルボニー、岩手の松田さんたちが、すごくもう破竹の勢いで、ヘラルボニーという例えば障害のある皆さんのアートをしっかりと守って、それを作品として名だたるブランドと一緒にコラボレーションしていこう、という動きがあるのですが、ヘラルボニーが現れたことで、全国で実は行われていたダウン症や自閉症の子供の皆さんのアトリエ活動とかお絵かき教室みたいなものが光を当てられたんですね。それはすごく嬉しいことだなと思います。なぜなら、僕も自分の友人がやっているダウン症の子供たちのお絵かき教室の先生役を、代々木上原の「アトリエ A」という場所で、ずっとやらせてもらっているからです。そしてこれをやらせてもらっているからですって言うことは、現在進行形、オンボーイングじゃないかっていう風に思いがちですけども、もう十年ぐらい行けてないんですね。でもそれでいいそうです。いつでも来て、別にその空いている期間は関係ないから当たり前のように来てくれる。どんなに間が空いてもいいし、毎週来てくれてもいいし、それを主催の赤荻さんという素敵なお夫妻ですけど、そういうふうに最初に僕が声をかけてもらったとき教えてもらって、確かに僕が行ってると

きに2年ぶりに来る子もいたし、毎週来る子もいたりする。でも同じ気分なんですよね。そういう場所を作っておくといろんな人が来やすいかなと思いますので、それは年齢関係ありませんでした。20代、30代、40代、50代は関係なく、歌手のMISIAさんも来たり、いろんな人が来たりする。そういうところを作ると地域づくりが固着化しないんじゃないかなってのも僕は考えているところですので、今いろんな幅広い活動の場所がありますから、年齢とかあんまりお気になさらずに僕も50代ですけども、何か自分がいいなと思う距離感のところにアプローチされて、そこで気分が合えば、自分のパーソナルスペースを侵害されないような形で地域づくりやまちづくりに関与できる場所を見つけられたらきっと居心地がいいと思います。そういう場所も必ずありますので。今日の皆さんにお聞きされると間違いなく、ここから300個ぐらいあると思います。はい。

(司会者)ありがとうございます。最後の質問となりそうですが…。  
挙手いただきました。よろしくお願いいたします。

(質問者3)淡路島の南あわじ市役所から来させていただきました露本と申します。普段地域の支援でいろいろ関わってるんですけども、先ほどおっしゃってた都市部と自分の地域をどう繋ぐかっていう、各市、行政機関が非常にいろいろ苦労しながらいろんな施策を打ってます。ただ今後ですね、一方で寄り沿いながら、何かお膳立しすぎているとか、ですね。地域の人に押し付けてるのかな、という悩みも結構抱えたりしてるんですけど、今後やっぱり、先ほど下北山村のような取組もありました。今後こういうふうな関係人口の取組をやって広げていく中で、行政ってどういう風な、あの、地域を様々見られてきた中で、こういうところを注意した方がいいんじゃないかなというところですね。もしあれば教えていただければと思います。

(指出氏)はい、いい質問ありがとうございます。一つは国土交通省が、皆様もご存知かもしれませんが去年(2024年)の6月に、倉石さんってすごい優秀な方が、ついに「二拠点」も法律として認めて、11月ぐらいに施行されて、それから二拠点を国が応援していく中で市町村が名乗りを上げていくんですけども、いち早く名乗りを上げたのは長野県塩尻市で、やっぱ塩尻市は早いなと思ったんですね。「二拠点の町にしよう」と舵を切られていて、これはおそらく制度的なものとか二拠点や、関係人口の中で、やっぱり特に若い人たちにとっては、その交通の移動費みたいなものがすごく制約になったりするので、これがどのぐらいちゃんと確保できるのかみたいなのが、このあと出てくるんじゃないかなっていう風に思ったりするところではあります。

もう一つ、さっきの下北山村の例でもあるんですけども、あまり迎える側がインターンシップ疲れみたいにならない方がいいと思いますので、よく来たねって言いなが

らあとは放っておくぐらいの感覚ということで、地域の人たちはあんまり触れない、あんまりこう丁重に扱いすぎない、みたいなところがむしろ居心地がいい世代に今うつってるんじゃないかなっていう風に思いました。

更にですね、公務員の皆さんにぜひやっていただきたいのは、人が集まる方法もこの3つしかないっていうふうに最近ちょっと断言してるんですけども、

- ① スナックをやること。
- ② バーベキューをやること。
- ③ カレーを食べることですね。

カレーは半端ないですよ。社会課題のほとんどは多分カレーで解決できます。ジビエの問題、いのししカレーにするとか、みんな最後カレーにしちゃう何でも。それで大体うまくいく。なので、そういうものを土日とかに、服やネームストラップを外して、関係人口の皆と一緒に楽しめるようなことができ始めると、地域に現れる人たちのヒントみたいなものが結構多くなるかもしれません。

行政の方はやっぱり最強なんですよ。いろんな人の地域にお住まいの方々の色や個性を御存じなんです。だから、そっちに触れると火傷するよとか、ボタンを掛け違えるとまずいよ、みたいなやつが必ずあるので、そういったときにやっぱりそういうことにちょっと相談しやすい気さくな形でスナックやってくれてるときとか、BBQ やってくれてるときに、お互いに肉を焼きながらそんな話ができたりするといいかなと思います。なので、やっぱり優しい眼差しで見つめてくれる公務外の素敵な友達みたいな瞬間もあるといいのかなという風に思います。

その3つは絶対いいです。僕スナックのマスターの依頼しか最近来ないですから。市長がママ役で、僕がスナックのマスターで、あとはばあ一つと地元の方が座ってて、いろいろ文句を言われて「申し訳ありません」と言いながらお酒を出す。超盛り上がるのでぜひやってみてください。(質問者の露本さんは)スナックのマスター似合っていると思います。